

判定に苦慮した 子宮内膜細胞診症例の検討

(株)秋田病理組織細胞診研究センター

関 南々帆 阿部 一之助 石井 明

水木 悠太 阿部 博之 金子 翔

阿部 彩 鵜澤 奈美子

概要

近年、子宮内膜細胞診において液状化検体法（以下、LBC法）による標本提出の利点について、従来法に対し採取細胞量の向上・細胞像の明瞭化による不適性率の低下・疑陽性率の向上といった報告があり判定精度の向上について期待される。

当施設でも子宮内膜細胞診LBC法標本の提出が増加しており、LBC法標本について従来法標本と比較してどのような判定傾向が見られるかを検討した。また、判定に苦慮した細胞診疑陽性症例のなかで組織診標本との対比がなされたものについて提示する。

2021年子宮内膜細胞診件数

対象期間:2021年1月1日~2021年12月31日

単位:件数(件)

	適正	不適正	不適性率
従来法	8583	958	10.0%
LBC法	1274	60	4.5%
合計	9857	1018	9.4%

従来法:直接塗抹標本 LBC法:BD社 Sure Path標本、MBL社 TAC-AS標本 用手法

2021年子宮内膜細胞診判定

対象期間:2021年1月1日~2021年12月31日

単位:件数(件)

	陰性	疑陽性以上	疑陽性率
従来法	8499	84	1.0%
LBC法	1248	26	2.0%
合計	9747	110	1.1%

従来法:直接塗抹標本 LBC法:BD社 Sure Path標本、MBL社 TAC-AS標本 用手法

細胞診疑陽性評価内訳

対象期間:2021年1月1日～2021年12月31日

Class	Ⅲa	Ⅲ	Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ
従来法	35	16	6	3	24
LBC法	15	4	3	1	3
合計	50	20	9	4	27

単位:件数(件)

細胞診疑陽性評価内訳

組織診検体の提出があった症例

対象期間: 2021年1月1日～2021年12月31日

Class	Ⅲa	Ⅲ	Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ
従来法	14	9	3	0	10
LBC法	6	1	1	0	0
合計	20	10	4	0	10

単位: 件数(件)

組織診標本との対比

従来法

対象期間: 2021年1月1日～2021年12月31日

	Ⅲa	Ⅲ	Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ
benign	9(64.3%)	4(44.4%)			
hyperplasia	4(28.6%)	5(55.6%)			
malignant	1(7.1%)		3(100.0%)		10(100.0%)
合計	14	9	3		10

組織診標本との対比

LBC法

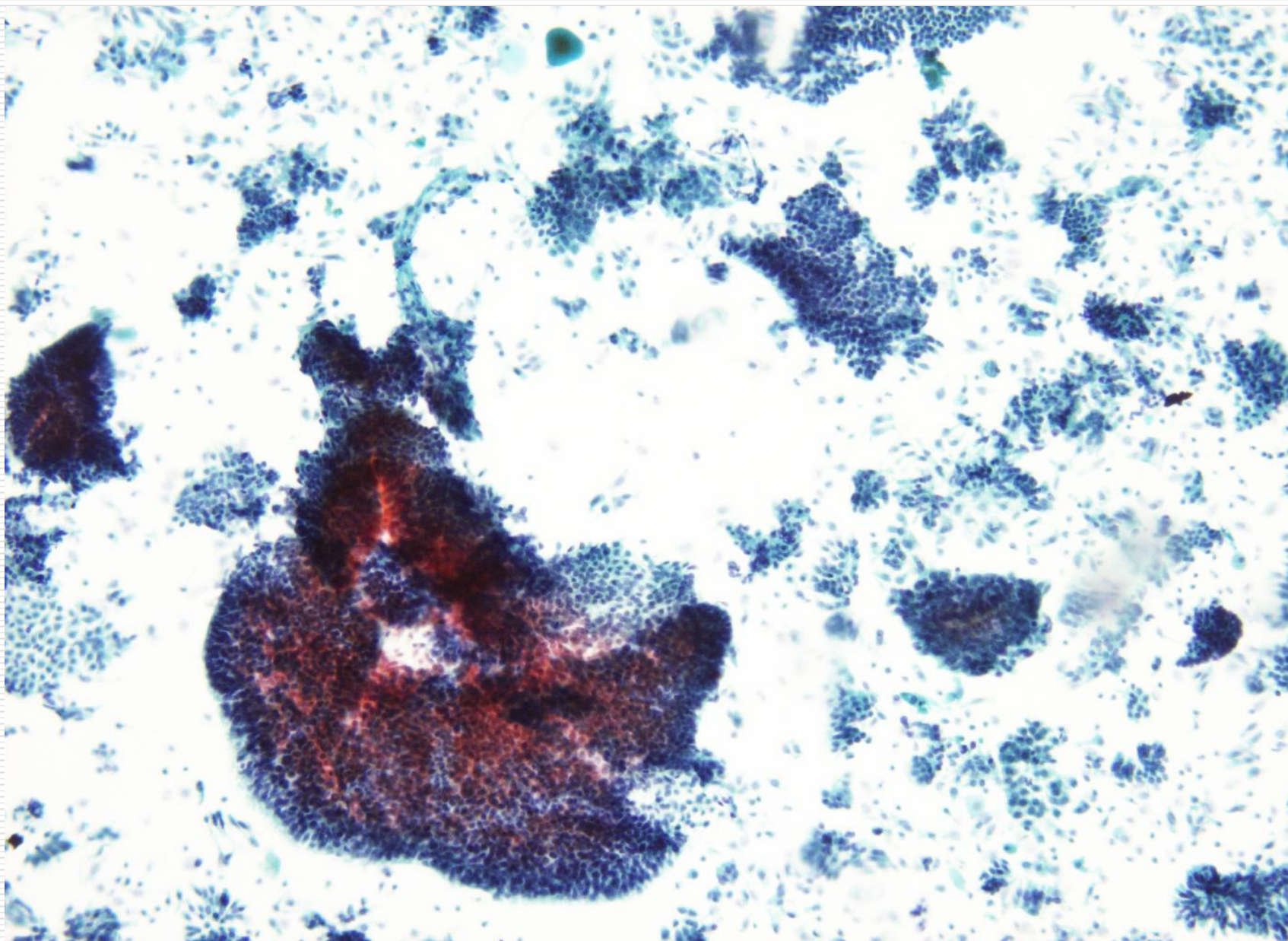
対象期間:2021年1月1日～2021年12月31日

	Ⅲa	Ⅲ	Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ
benign	3(50.0%)				
hyperplasia	2(33.3%)				
malignant	1(16.7%)	1(100.0%)	1(100.0%)		
合計	6	1	1		

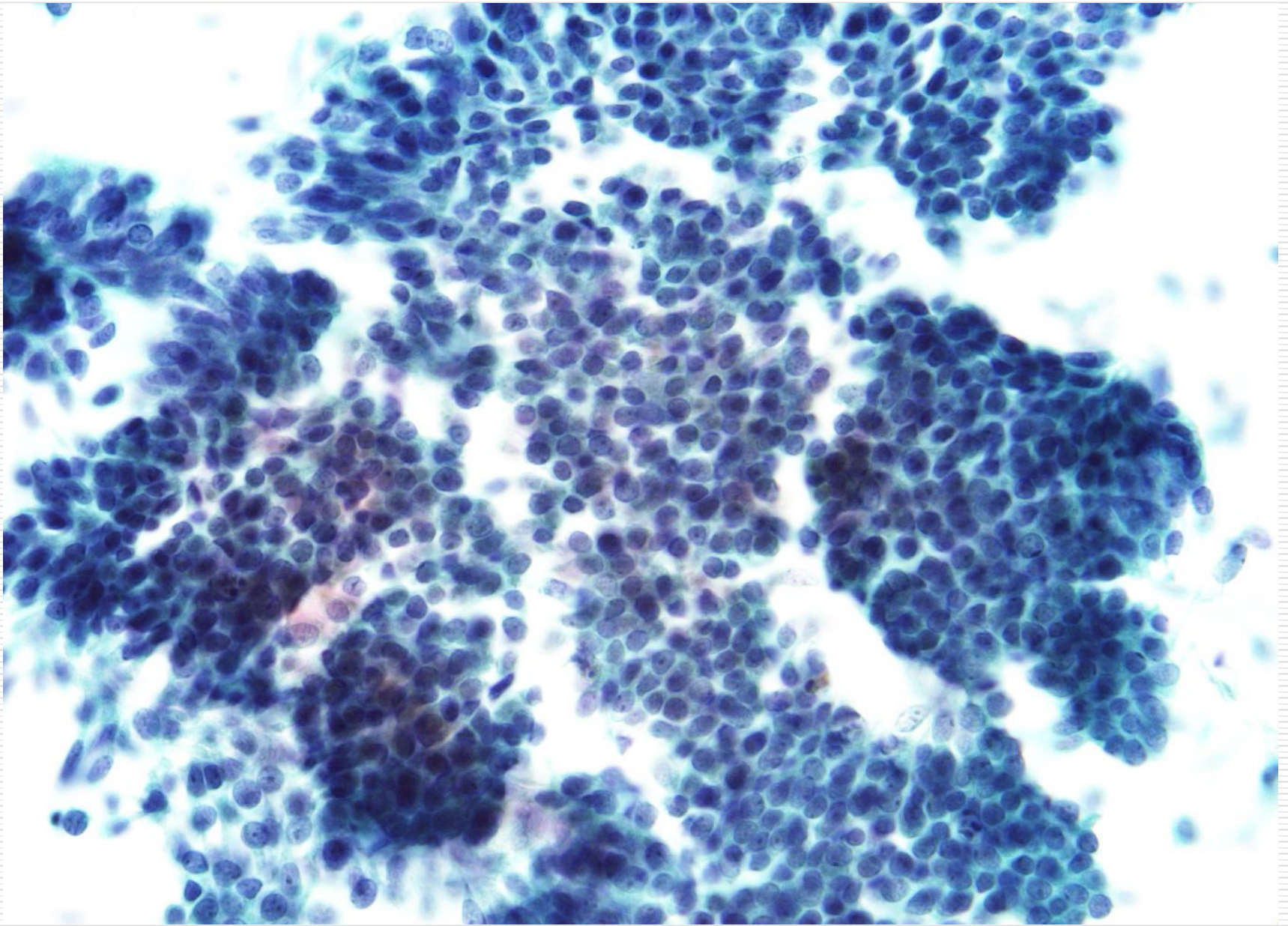
症例提示

症例1

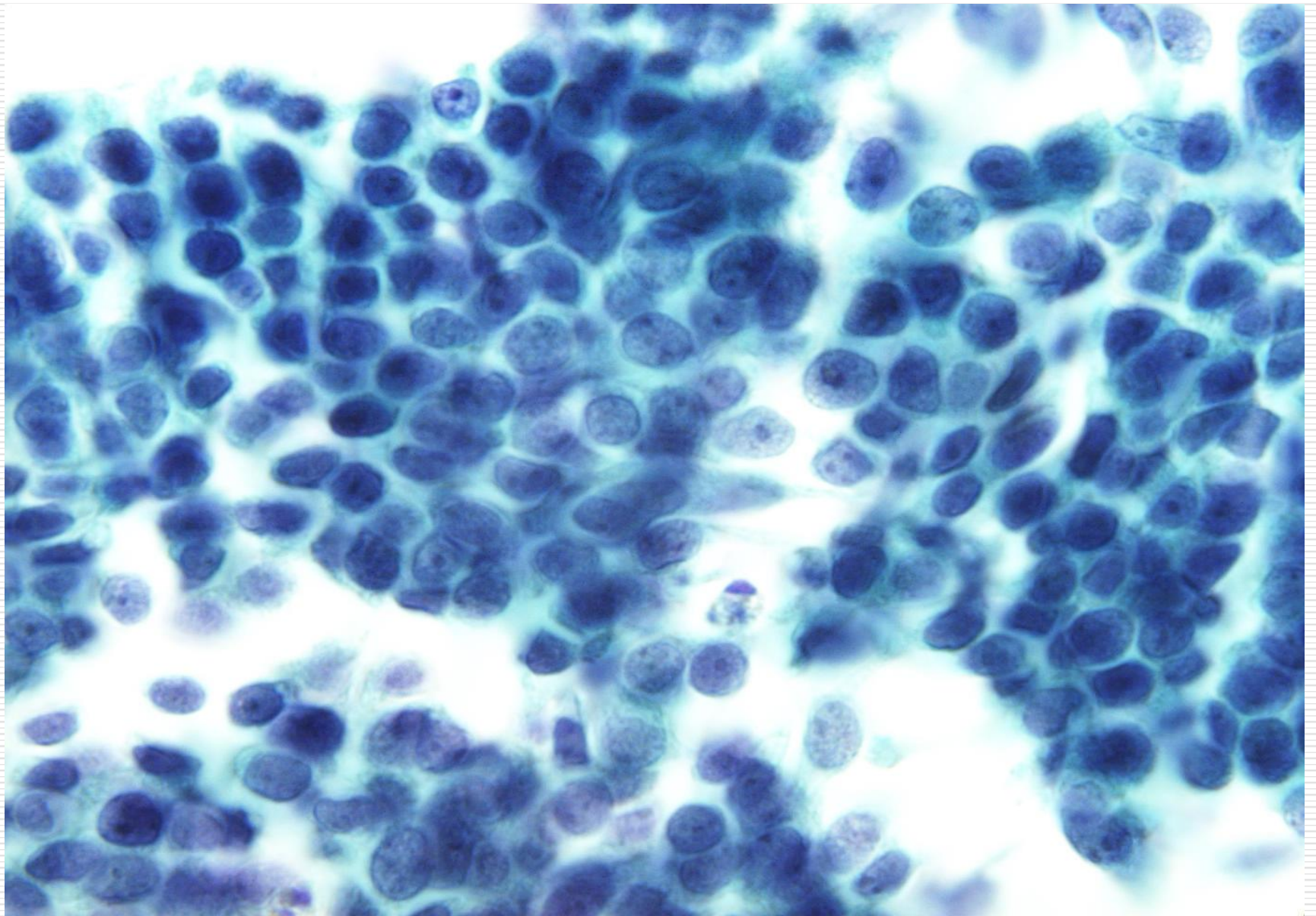
- 年齢: 77歳
 - 主訴: 内膜肥厚
 - (組織診時) 内膜肥厚 (14mm)
 - 標本: LBC法
-



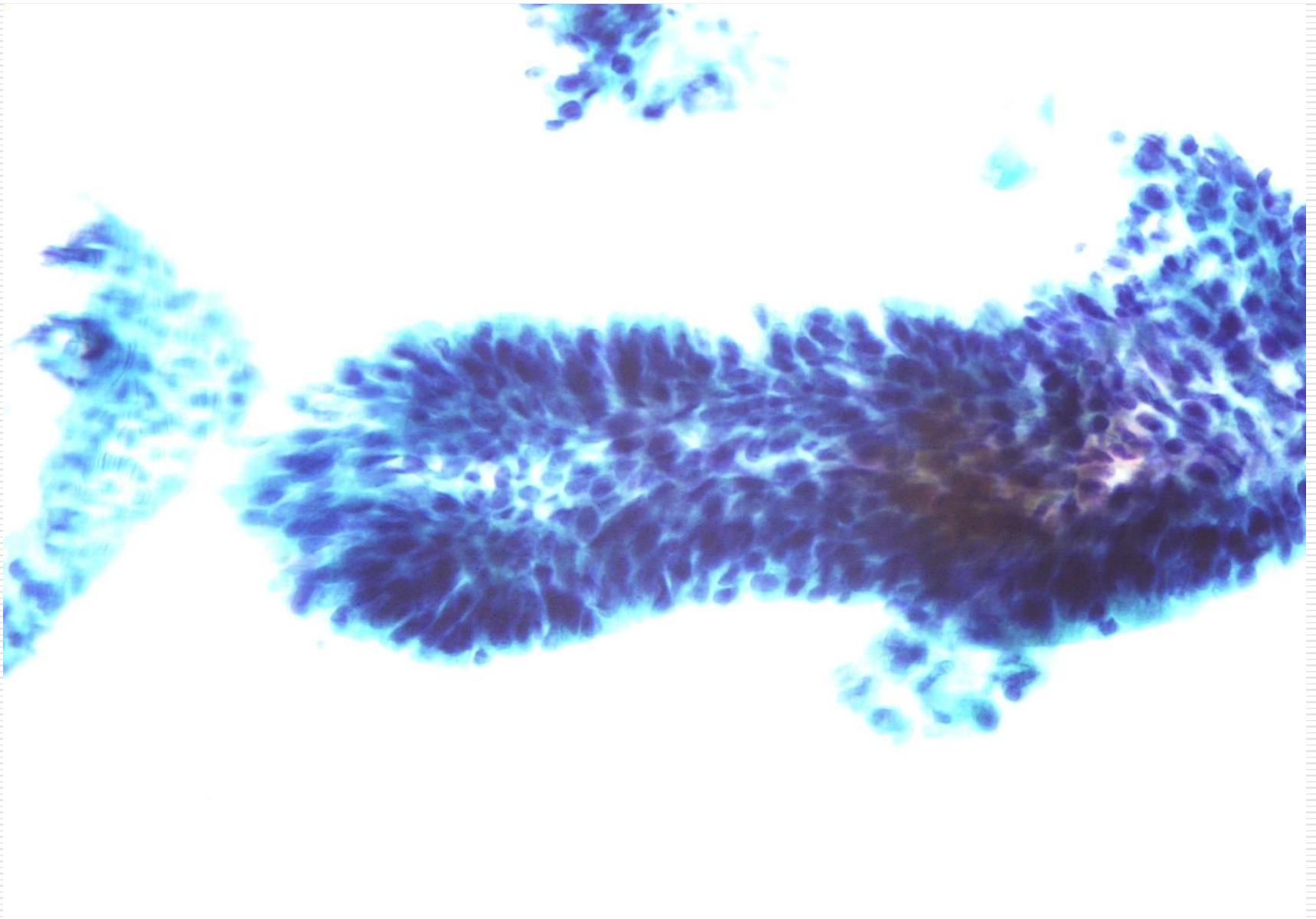
对物x20



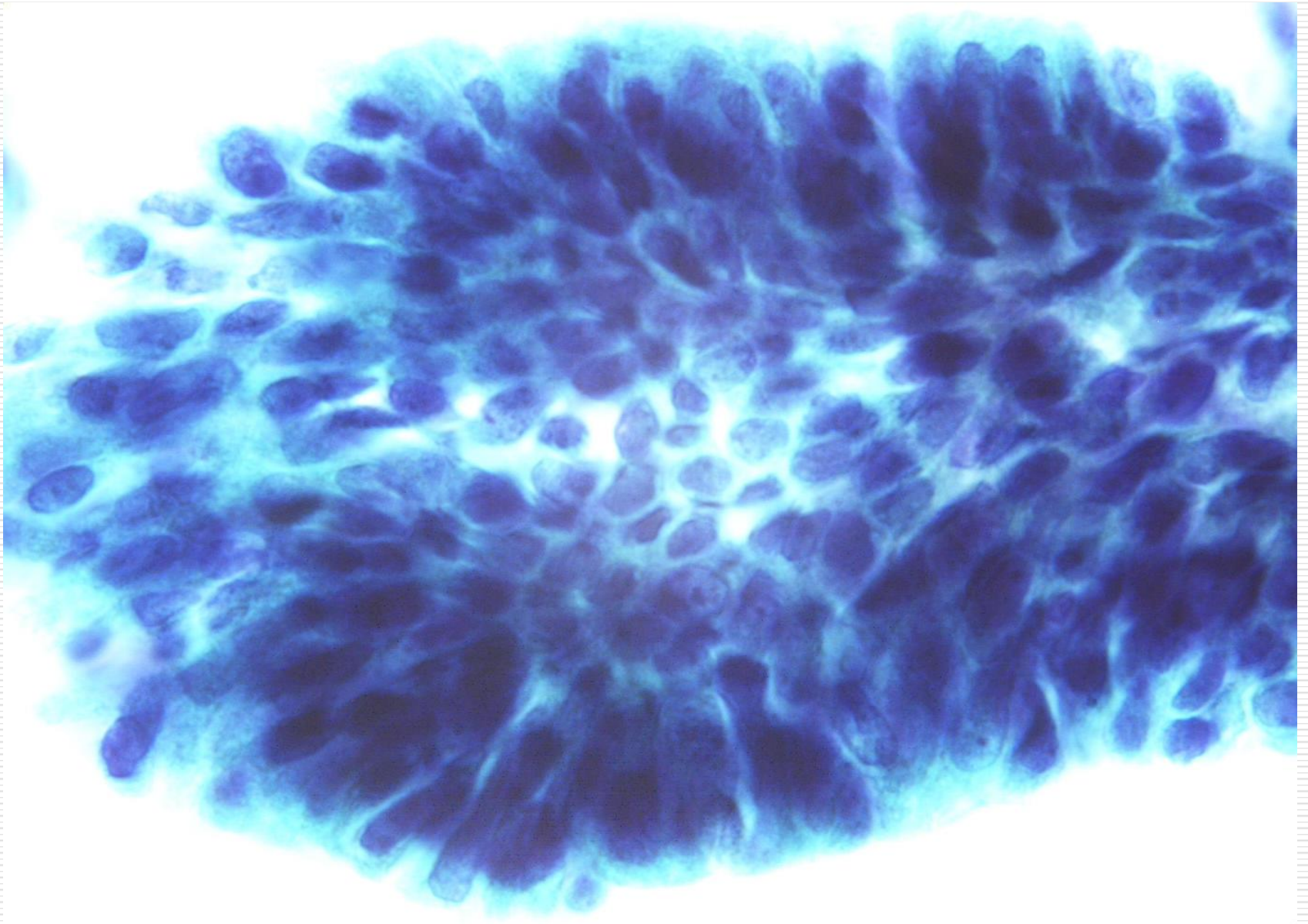
対物x40



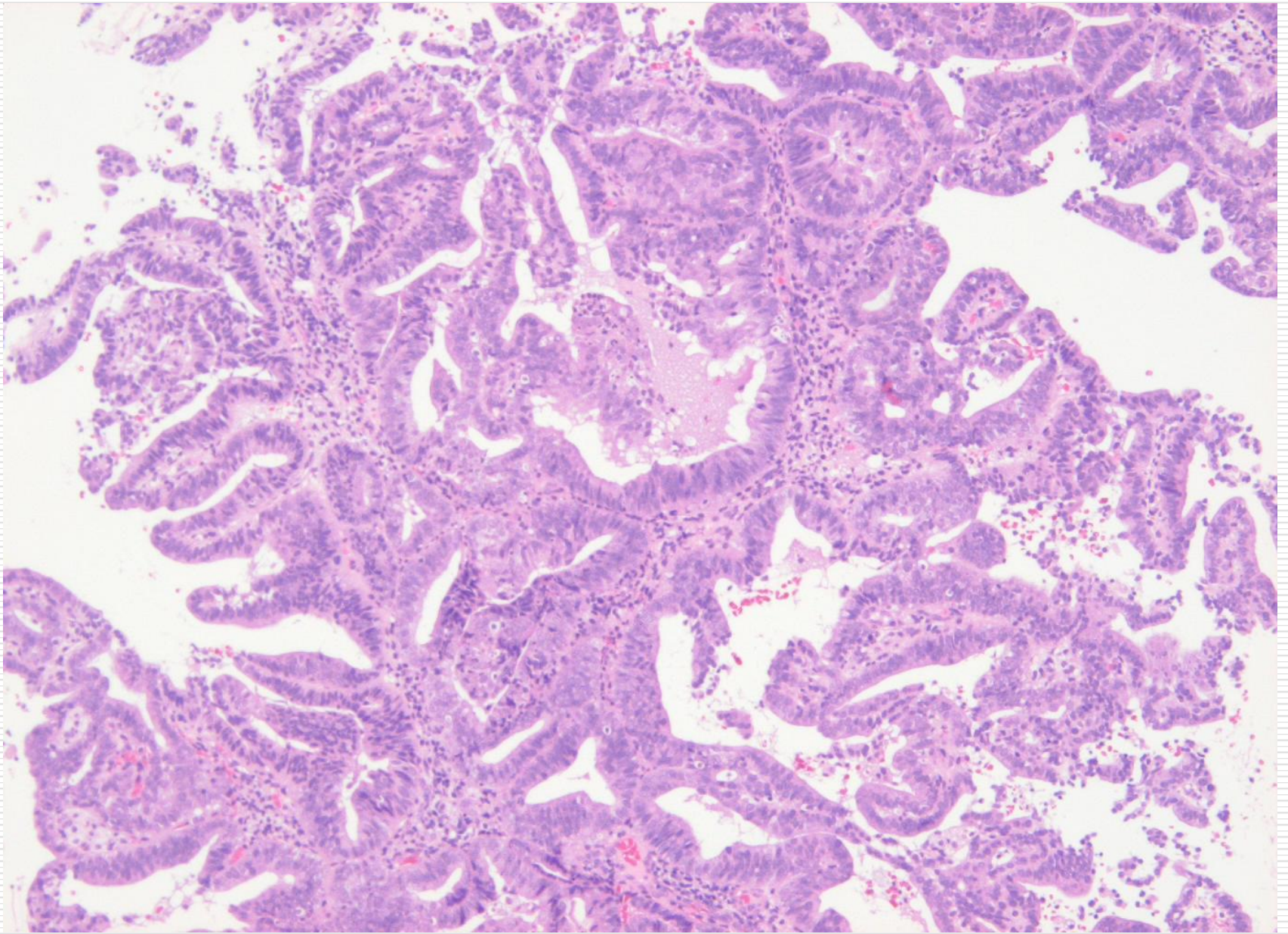
対物x100



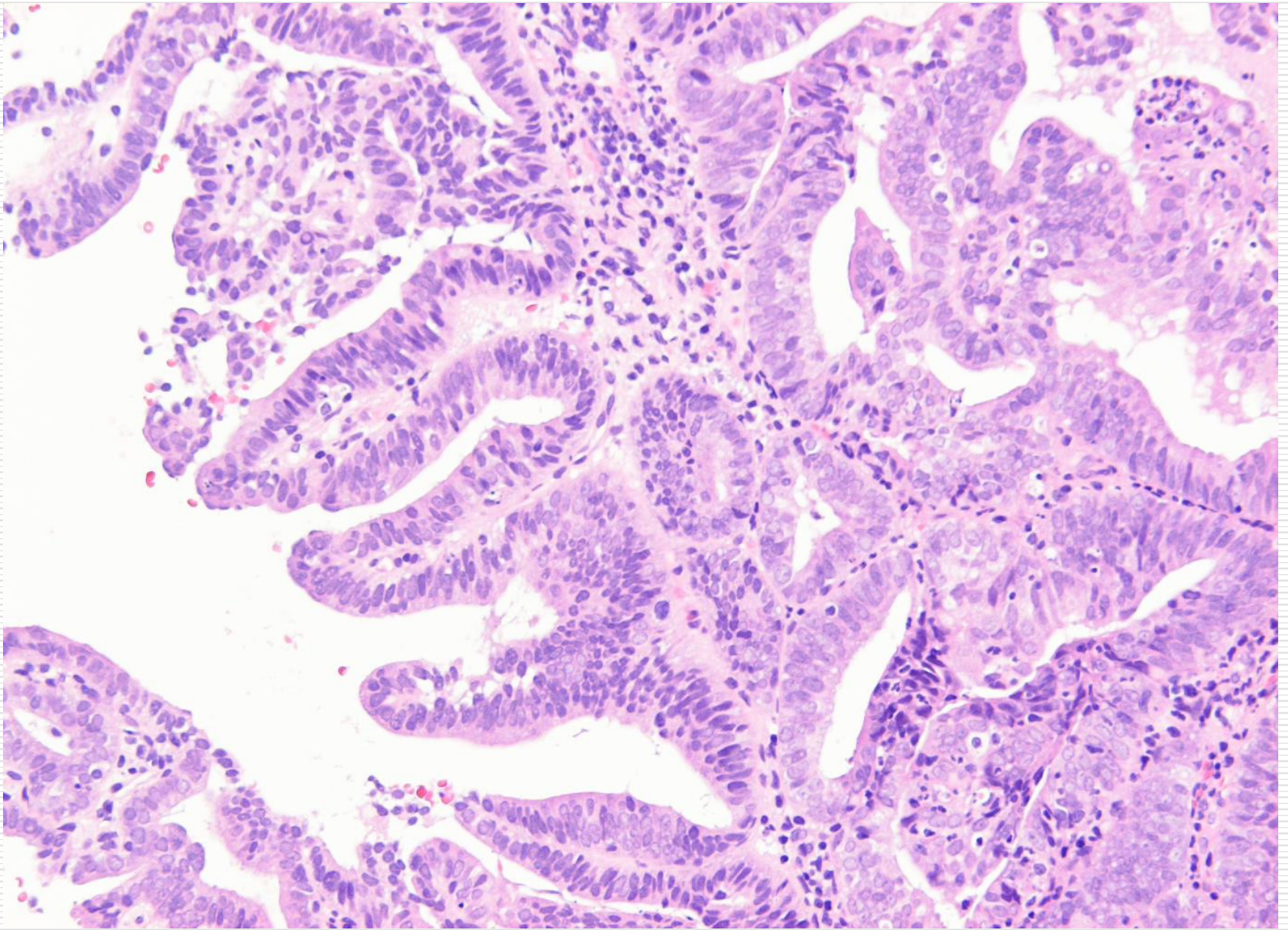
対物x40



対物x100



対物x10



対物x20

症例1 検討結果

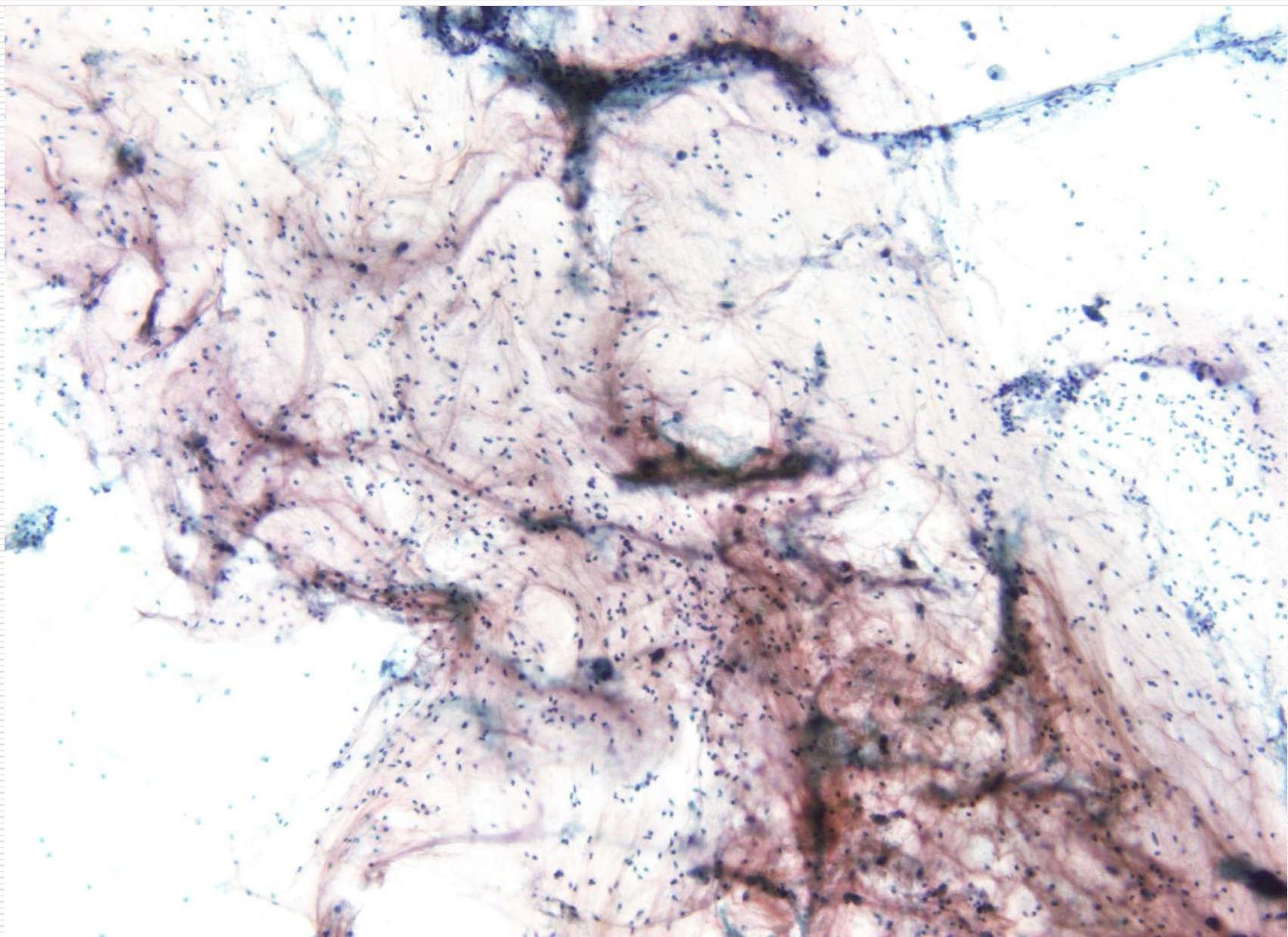
- 細胞診判定：疑陽性
Endometrial hyperplasia
- 組織診診断：malignant
Endometrioid adenocarcinoma

細胞診標本では背景は明瞭、多数の細胞集塊がシート状に近い形態を示していた。腺管構造で増生を示す細胞集塊も見られ、構造異型を指摘することは容易であった一方、細胞異型に乏しく癌の判定には至らないと考えた。

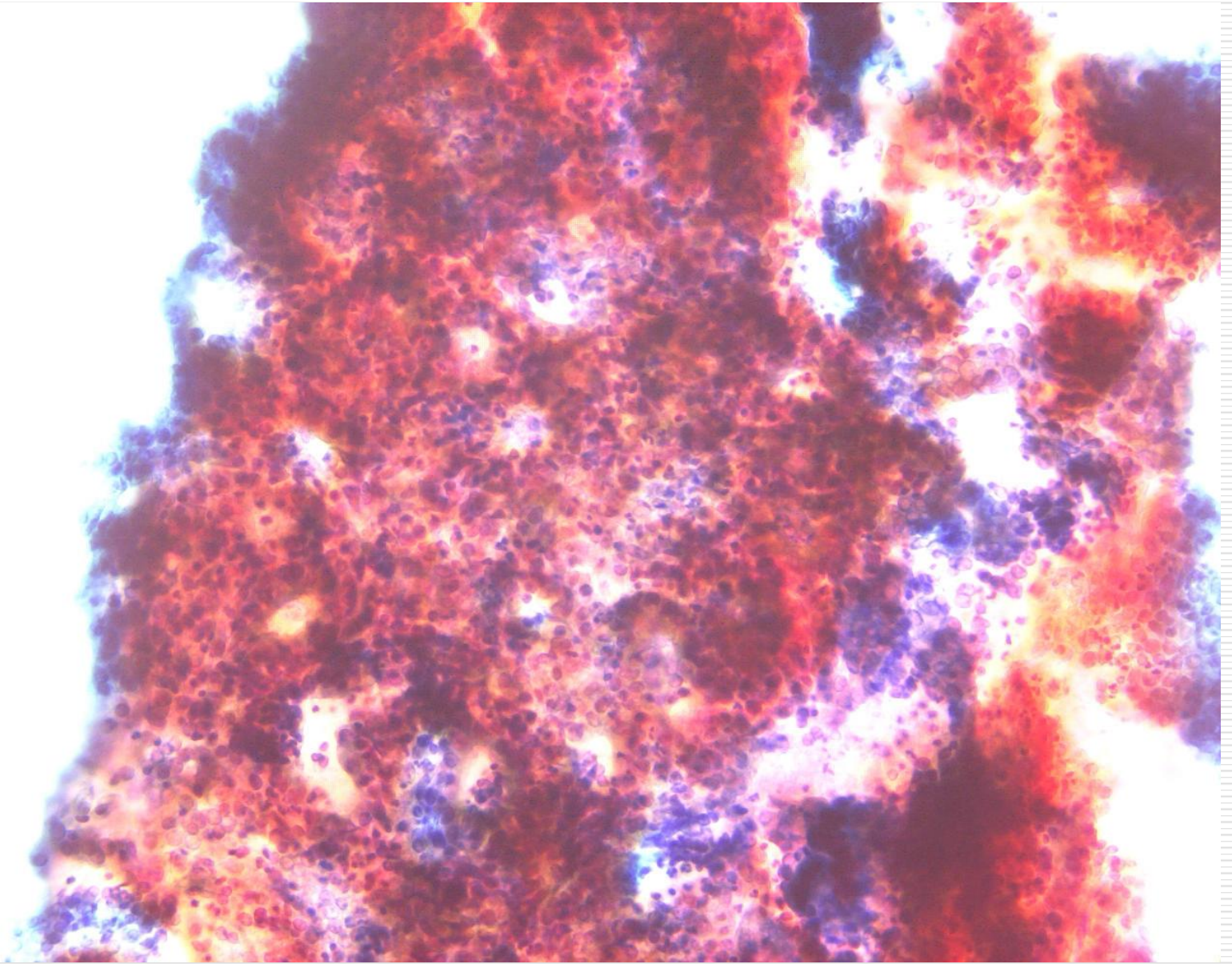
再検討においてシート状に近い集塊にも重積を認め、異型細胞集塊である事が示唆された。標本作製時に乳頭状構造が壊れてシート状集塊へと広がったために組織診標本と乖離がある細胞像となった可能性が考えられる。

症例2

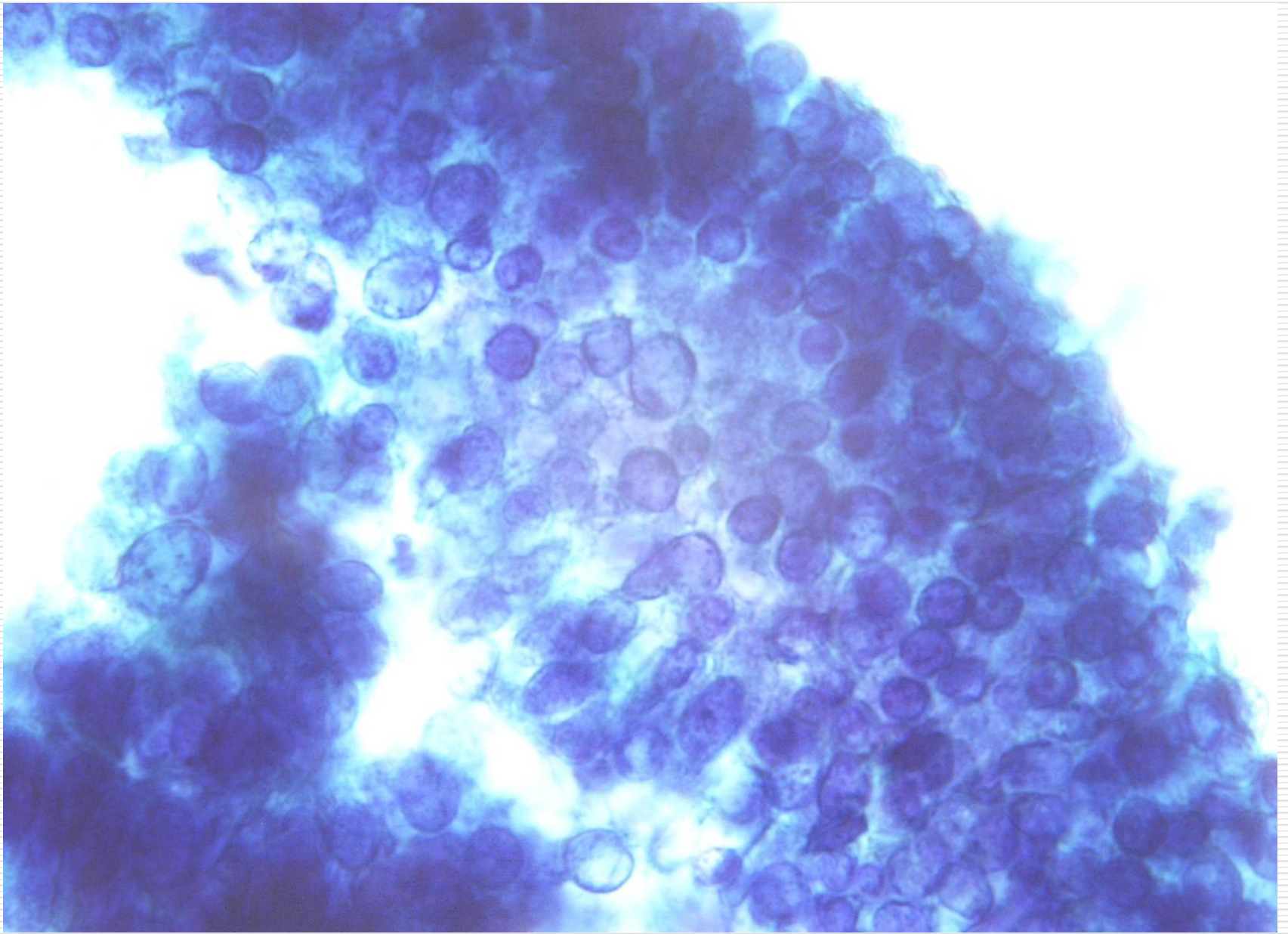
- 年齢: 64歳
 - 主訴: 内腔に液体貯留
充実性部分あり
子宮体癌疑い
+ (組織診時) 内腔に乳頭状突起
 - 標本: 従来法
-



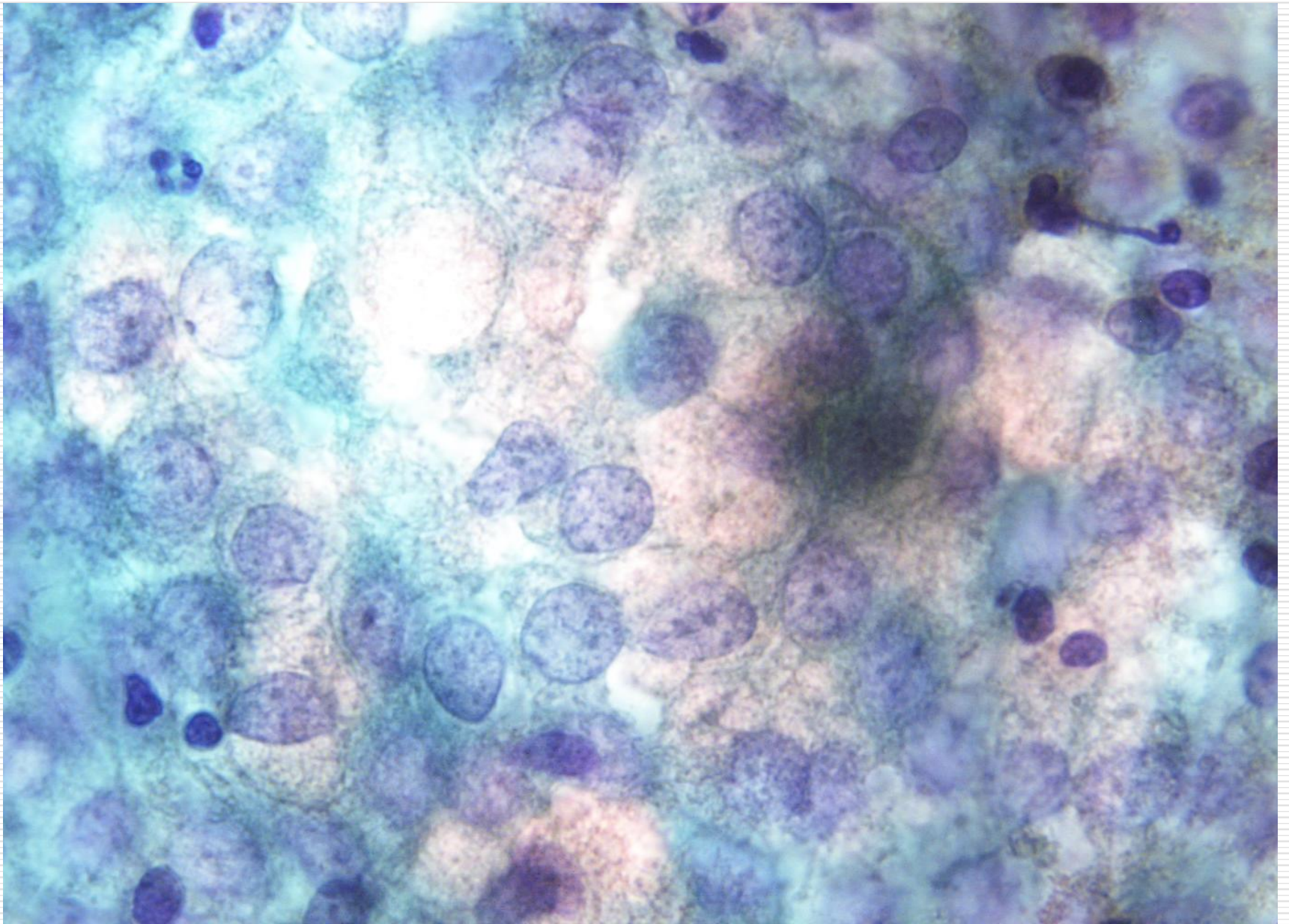
対物x20



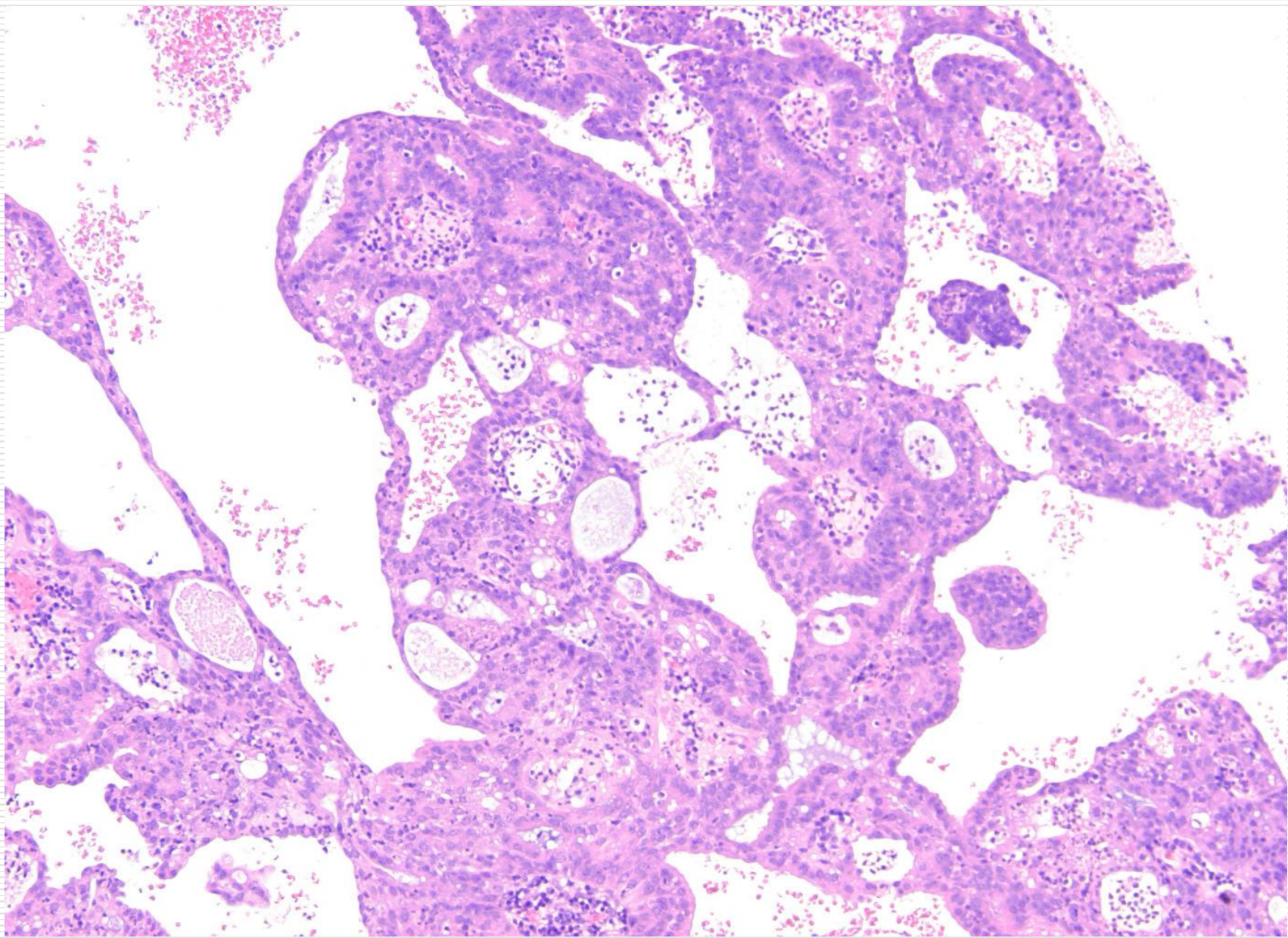
対物x40



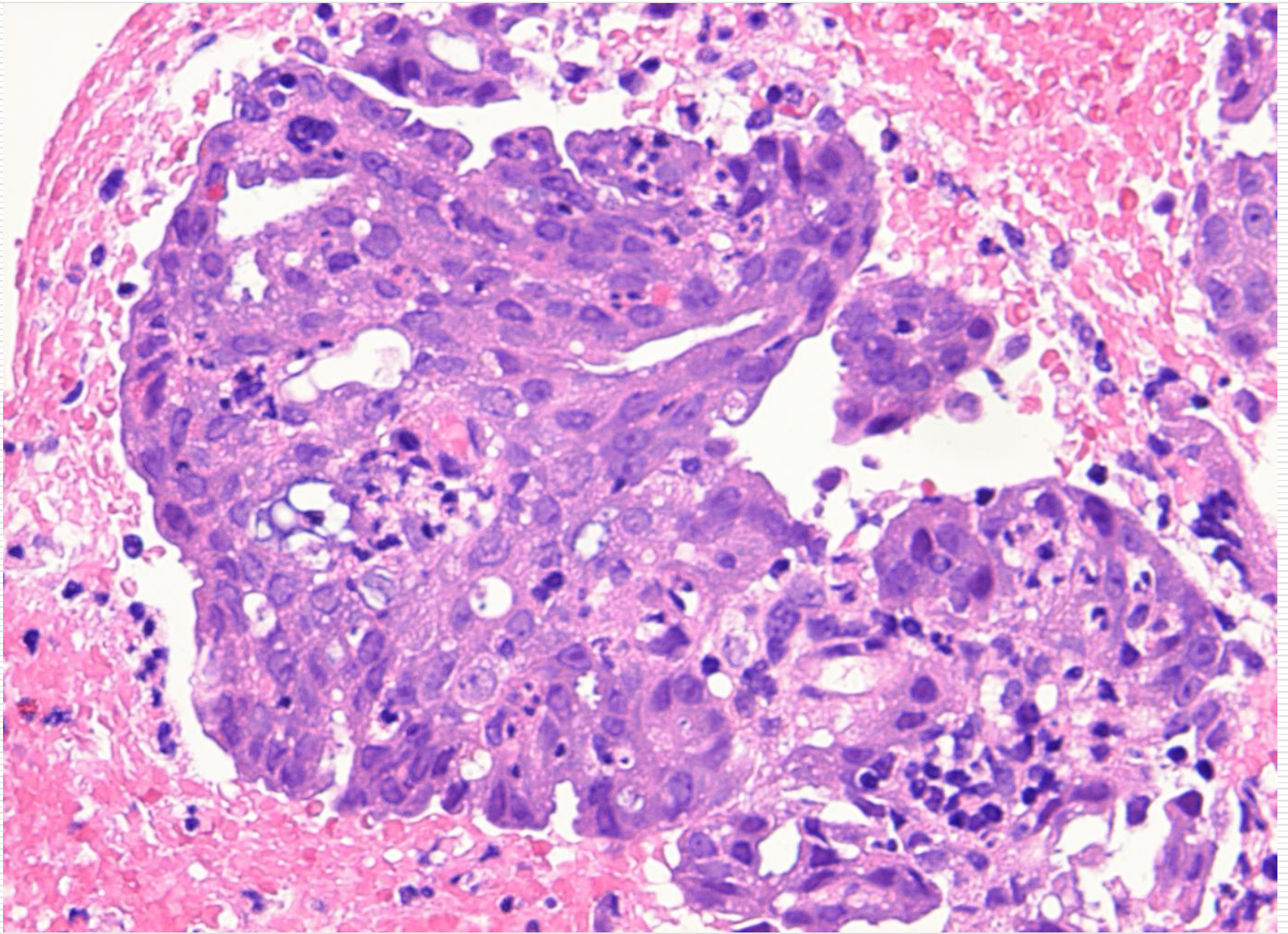
対物x100



対物x100



対物x10



対物x20

症例2検討結果

□ 細胞診判定：疑陽性

Atypical hyperplasia～Endometrioid carcinoma

□ 組織診診断：malignant

Endometrioid adenocarcinoma

細胞診標本背景に粘液成分を豊富に認める一方、上皮細胞集塊の出現は多くなかった。異型細胞は篩状構造などの構造異型を認め細胞異型も伴うものの、細胞量から癌の断定を避け子宮内膜異型増殖症と高分化類内膜癌の鑑別を要する症例とした。

再検討において細胞診標本上には組織像と同様の異型細胞像が見られたものの、粘液性分豊富であり異型細胞が十分に標本上に得られなかったことで組織診診断と乖離がある細胞診判定につながった可能性が考えられる。

細胞診標本作成法による違い

	従来法	LBC法
標本背景	時に血性・炎症性 粘液性	きれい
標本細胞量	採取者の技量・ 検体性状により左右	多い 小視野に高密度細胞像
細胞集塊	大型・組織像を反映	小型化・断片化
細胞の 見やすさ	時に困難 (血性強い場合等)	明瞭

本検討のまとめ

当施設子宮内膜細胞診症例において

- 不適性率(従来法>LBC法)
- 疑陽性率(LBC法>従来法)

他施設で報告されているものと同様の傾向であった。

細胞診疑陽性症例において組織診標本との乖離が見られたものは標本作製方法に由来するアーチファクトが要因の一つと考えられる。

標本作成法ごとに適した鏡検技術を習熟する必要がある。

ご静聴ありがとうございました
